

1. シャーロックホームズとジェイムズ・ボンド(p112-113)

- ・ ホームズ・常軌を逸して訓練され、プロを上回る有能なアマチュア  
自国内部の暴力行為についての情報を求める
- ・ ボンド・いつも簡単に我を忘れる、捕まる、上司の命令に逆らうプロ  
自国外の暴力行為についての情報を求める  
⇒情報と暴力のはざまに位置する典型的な官僚制のカリスマ的英雄
- ・ ハリウッドが繰り出す「掟破りの一匹狼デカ」・・・これら2つの人物の総合  
＝官僚制的秩序の内部に存在するが、たえずそこからはみ出している犯罪取締人  
しかし・・・官僚的秩序こそが、かれらの意味と存在のすべて  
↓こんなの、単純化じゃないの？という指摘に対しては
- ・ レヴィ＝ストロース・少数の単純な原理を限界までつきつめた真の知的勇気を持ち主  
＝理論の領域内部にとどまるかぎり、単純化はかならずしも愚かさの一形態ではない。  
⇒むしろ、すぐれた一形態でありうる。

2. 愚かさと暴力(p113-115)

- ・ 暴力・暗喩ではないときに、問題が生じる
- ・ 現実の警察官についてのジム・クーパーの観察・警察官から暴行を受けた人の大多数がいかなる犯罪とも無縁だった
- ・ 警察官はなぜ殴る？・警察官は、泥棒を殴っているのではない  
⇒警察から暴力的反応をひきだすのは、「状況を定義する」かれらの権利に挑戦すること  
例：「ちょっと待ってくれ、なんでこのひとに手錠をかけるんだ、かれは、なにもしてないぞ！」  
のような口答え
- ・ 警察の警棒・単純な行政的図式を押し付ける国家の完了による命令とその強制力の独占が合流する地点  
⇒官僚制の暴力は、それに代替する図式や解釈を主張する者にむけられる攻撃からなる。
- ・ ジャン・ピアジェの定義・成熟した知性とは複数のパースペクティブのあいだを調整する能力  
⇓  
警官の暴力＝構造的暴力  
⇒警官が暴力に訴えるそのときに官僚制的権力が字義通り幼稚な愚かさの一形態と化すのはなぜか、理解できる
- ・ 官僚制・・・それ自体が愚かさの諸形態であるというより、愚かさを組織化する方法であり、想像力の極端なまでに不平等な諸構造-構造的暴力ゆえの-によってすでに特徴づけられた諸関係を管理運営する方法である(p115, 111-13)。

3. 官僚制の原因(p116-117)

- ・ 官僚・権力のあるものに特有の、高度に図式化された極小の<sup>きょうがい</sup>狭隘な観点をとるに留まりながら、そのような観点を、権力に制約をかけたり、その最悪の帰結を緩和する方法に方向転換させようとしている  
⇒善意があっても、不条理な堂々巡りが起きてしまう理由

- ・ 官僚的介入・・・この世界に大いなる善をもたらしてきた  
⇒これ自体は間違いない。  
例：無償教育、ユニバーサルヘルスケアを伴ったヨーロッパの社会的福祉国家  
↓しかし・・・  
権力あるもの特有の意志された無知の諸形態を引き受け、それに科学の特権を与えることで、みずから墓穴を掘ってしまう  
↓それでも・・・  
不安につけこみ、最大に効果のあったプログラムを骨抜きにし、解体してしまう政策に、1980年代以降、右翼は民衆の支持を集めることができた  
↓なんで！？左翼の運動もあったじゃん。
- ・ 左翼の運動・・・パリの若者の叛乱「すべての権力を想像力へ」＝官僚制的権威への叛乱  
最近の左翼・・・安全で「現実主義的」な路線を取るよう決断、墓穴を深めている  
↓現実主義的、とはなんだったのか？

#### 4. 現実主義的とは(p118-123)

- ・ 1968年のスローガン・・・「現実主義的になれ、不可能なものを要求せよ」  
⇕  
官僚主義的構造に挑戦してきたはずの運動が、官僚制を形成している状況  
→なんで！？
- ・ 「現実主義的」という語・・・官僚制を形成するとき、一種の妥協として働く  
例：ひとは現実主義的にならなければならないし、あまりに多くを要求しすぎてはならない  
↓「現実主義的」といったときの「現実」って？
- ・ ニューヨーク直接行動ネットワークの逸話・・・自動車を寄付されても、団体として所有できない  
⇒自動車を「所有」できるのは、団体か個人。ネットワークでは登録できない。  
↓  
社会を民主化するという目標を持つプロジェクトが、物質的現実と遭遇すると泡と消えてしまう
- ・ 現実の財産・・・ラテン語の「レス」＝モノに由来するのではなく、「ロイヤル」とか「王に属する」という意味のレアールから由来している
- ・ 財産が現実的であること・・・国家がそれを接收するか破棄するかが可能であるということ
- ・ 現実主義を受け入れること・・・国益の追求にあたって、国家はみずからの利用できる（軍事力をふくむ）能力をすべて利用するものであるという想定を受け入れること
- ・ 「現実」・・・物質（＝モノ）の現実ではない  
⇒国益が現実的であるのは、かれらがあなたを殺害することができるから

#### 5. 国家による強制力の使用の独占(p124-127)

- ・ 国家による強制力・・・破壊したり他者に痛みを与えたり、切り刻んだり危害を加えるぞと、他者の肉体に脅しをかける権力が、宇宙総体を動かすエネルギーの社会版であるように扱われるような政治的存在論がこの言葉に現れている
- ・ 科学・・・宇宙を支配する諸力を理解するために、物理法則の性質を探求する
- ・ 警察・・・社会を支配する法律を強制するために、物理力の科学的適用にかかわる専門家  
⇒これこそが、右翼思想の本質  
＝暴力をして社会的存在や常識の地平そのものの規定因にまで昇格させる政治的存在論

⇩

左翼・・つねになにが究極的に現実的なものであるのか＝政治的存在の根拠そのものについて、右翼とは異なる想定に基盤を置く

＝想像力の政治的存在論

＝世界が存在するのは、わたしたち全員が集散的にそれを生産するがゆえだという立場

## 6. 想像力とは？(p128-135)

- ・ 想像力・・あまりに多義的
  - 現代的な定義・・現実⇔想像力
  - 古代・中世・・物質的現実と合理的魂を結合する移行地帯（中間地帯）
    - 理性＝本質的に神の一樣相
    - ↓
- 合理的精神が自然から感覚的印象を受容するといったことが、いかにして可能なのか？
- ・ 媒介的実態、 pneuma・・物質的知覚がそこを通過していく一種の循環システム
- ・ イマジナリー・・想像上の友人たちという意味をもつようになったのはデカルト依頼
  - 想像力の政治的存在論は、語義矛盾となる。想像力は現実の基礎になりえない。
  - ＝考えることはできるが、現実ではないから。
  - ⇒こういった想像力に関する考えを、「想像力の超越的観念」と呼びたい。
- ・ 想像力の超越的観念が優勢になった時期・・18世紀中盤から後半
  - ⇒産業資本主義、近代的官僚制社会、左右の政治的分割の起源が位置する時代
- ・ ロマン主義者・・想像力＝魂が占めていた座にとって代わるもの
  - ⇒想像力とは、魂そのもの。たんなる合理性を超越するもの。
  - ⇒想像力は芸術、すべての創造性の源泉、人間の共感、モラルティの基礎
  - ↓改めて1960年代のスローガンに立ち戻って考えていく
- ・ 「すべての権力を想像力へ」・・超越的想像力（ある種のあらかじめ組み立てられたユートピアのヴィジョンを押し付ける試み）だった場合、帰結は災厄となりえる。
  - 逆に、内在的な想像力（普通の料理、看護師、機械工、庭師の実践的想像力）に十分な権力をあたえないこともまったく同じ帰結にいたるおそれがある。
  - ⇒想像力にまつわる異質な観念のまぜこぜは、左翼思想の歴史を貫通。
- ・ マルクスの矛盾した思想・・人間は想像力を働かせてすべての物質的生産を行う⇔革命家は建築家のようにすすんではならない
  - ↓なぜ、マルクスの思想は矛盾したのか
- ・ 疎外・・物質的生産と社会的諸関係の双方の領域でわたしたちは疎外を語るができるが、それぞれの領域で疎外はまったく異なった様式で働いているのでは？？
- ・ マルクスが関心をよせた工場生産領域・・想像的労働に比較的多く支配的階級が関与する数少ない環境のひとつ
  - 労働者・・退屈極まりない機械的作業/ エリート・・想像的労働（想像力による作業にすべての時間をささげる）
  - ⇒このような想像力の偏極構造の内部で生きることの主観的経験こそが、わたしたちのいう「疎外」が指すもの。
- ・ 政治経済学・・労働を、賃労働/家内労働の2つに労働を分割

## 7. 20世紀の革命的問い(p136-141)

- ・ ユートピア主義・・よりよい世界を想像し、それからそれを実現させようとするのが問題なのでは
- ・ 社会理論・・問題はここにあるのでは
- ・ 革命・・それ自体に根本的な欠陥があるのでは  
↓1960年代以来
- ・ シチュアオニスト・・わたしたちを受動的消費者に仕立てている論理をつきくずす創造的な転覆の行為によって、解決できるのではと考える  
※H松の疑問：これって、1杯のコーヒーを選ぶ選択そのものが政治であると考えようような立場なんだろうか。資本主義的な論理に基づいた安いコーヒーを選ぶのか、それとも、搾取はないが市場価格からすると高いコーヒーを選ぶのかの2択になったとき、迷わず後者を選ぶ、的な。
- ・ 「公衆」の選択・・・私たちが公衆、と呼ぶものは、特定の諸制度を通じて形成され、生産される矛盾する行動をとることもある
- ・ 「公衆」・・・公衆は、(労働力として)仕事をしない(※でも、公衆はあきらかに仕事を行っている)公共のオーディエンス、公共サービスの消費者というのが役割  
=国民、選挙民、人口  
⇒官僚制や制度的実践の産物
- ・ 疎外の機構・・・本質的に官僚制的であり、それゆえ、根本的に疎外的に機能する制度化された活動の枠組みによってそれらが現実化される  
⇒人間の想像力を打ち砕き、解体するための道具  
↓それらに対抗する進化の担い手が、フェミニズム

## 8. フェミニズム(p142-147)

- ・ フェミニズム・・現実の生地に掘られた穴を、どうすれば非官僚主義的なやり方で組織化できるのか、想像力の力能のいくばくかでも長期的に維持できるかを問いかけてきた
- ・ 権力・・ひとを怠け者に仕立てる、ひとがそれについて考える必要のないもの、知る必要のないもの、おこなう必要のないものに関わっている。
- ・ 鞭うたれる奴隷・・・問答無用の服従のコミュニケーション  
→犠牲者をして語らしむのが問題なのではなく、彼らを黙らせる過程への関与についての問題  
⇒誰をも愚かものに仕立て上げる死角の存在  
⇒フェミニスト理論のなかで展開されてきたもの

## 9. H松の疑問

- ・ 「公衆」が行う「仕事」について(p140-142)  
公衆というのは、つまるところ、国や権力者(もっといって官僚制という仕組み)にとって都合のよい人口であって、行っている「仕事」はそうした仕組みに賛同する行動であるという解釈でよいのだろうか。
- ・ (ここからは個人的な興味かつ、マニアックな話) 障害者就労の制度をうまく使い、行政からのお金を最大限もらえるようにして、10時—15時まで障害のある人=利用者<sub>に</sub>楽しく過ごしてもらえばいいと考えている障害者就労B型事業所は、構造的暴力のもとで運営されていると言い切れるだろうか。